

農学生命科学研究科

I	教育の水準	教育 15-2
II	質の向上度	教育 15-4

I 教育の水準（分析項目ごとの水準及び判断理由）

分析項目 I 教育活動の状況

〔判定〕 期待される水準を上回る

〔判断理由〕

観点1-1「教育実施体制」について、以下の点から「期待される水準にある」と判断した。

- 学内の他部局や外部機関と、大学院教育に関わる連携協定を締結し、学生の研究指導等における交流を行っている。
- 中国、韓国等のアジア諸国の学生を中心に留学生の受入を実施しており、受入人数は平成22年度の163名から平成27年度の281名となっている。

観点1-2「教育内容・方法」について、以下の点から「期待される水準を上回る」と判断した。

- 産学官民連携型農学生命科学研究インキュベータ機構（アグリコクーン）では、平成24年度から農環境の放射線教育のために「農における放射線影響フォーラムグループ」を立ち上げ、現地調査、附属施設の活用、サンプルの測定等、実習・体験・演習に主軸を置いたプログラムを実施している。また、平成25年度には附属牧場で行われる牧場実習と、福島県伊達市小国地区で行われる森林実習をカリキュラム化しているほか、平成24年度には福島県飯舘村において、平成27年度にはスウェーデンにおいてワークショップを実施している。
- 農学生命科学が関与する分野において先端情報利用科学の教育研究を充実させるため、アグリバイオインフォマティクス教育研究プログラムを設けており、バイオインフォマティクスの基礎、方法論、先端トピックス等の15科目の講義を実施している。また、目的に応じて科目を選択し受講することが可能となっており、実践的な技術を身に付けるため、基礎と方法論の科目はすべて実習と一体化した講義を実施している。
- 研究科と交流協定のあるアジアを中心とした海外の大学の研究者を受け入れ、英語で博士課程の教育を行う環境調和農学特別プログラムを平成27年度から設けており、環境や生態系への影響についてディベートを通じて学ぶ演習の履修を必須としている。
- 英語による講義や研究指導を行う秋季入学のプログラムである国際農業開発学コースは、平成22年度に学生の受入を開始しており、平成26年度までに40名を超える学生を受け入れている。

以上の状況等及び農学生命科学研究科の目的・特徴を勘案の上、総合的に判定した。

分析項目Ⅱ 教育成果の状況

〔判定〕 期待される水準にある

〔判断理由〕

観点2-1「学業の成果」について、以下の点から「期待される水準にある」と判断した。

- 平成22年度から平成26年度の標準修業年限内の修了率は、修士課程は平均85.4%、獣医学博士課程を除く博士後期課程は平均59.8%、獣医学博士課程は平均74.6%となっている。
- 平成22年度から平成26年度の学生の受賞・表彰は、平均40件程度となっている。また、平成22年度から平成27年度の日本学術振興会特別研究員の採択状況は、博士課程在籍者数の10%程度となっている。

観点2-2「進路・就職の状況」について、以下の点から「期待される水準にある」と判断した。

- 平成22年度から平成26年度における修士課程の修了生のうち、博士後期課程への進学者は3割程度、就職者は7割程度となっている。また、博士後期課程の修了生のうち、教育・研究機関への就職者は2割程度となっている。
- 平成27年度に実施した修了生へのアンケートでは、ほぼ全員が「大学院教育は有益であった」と回答している。また、大学院教育によって習得できたと思われる項目については、専門的知識が9割程度、論理的思考力が8割程度、プレゼンテーション能力が7割程度となっている。

以上の状況等及び農学生命科学研究科の目的・特徴を勘案の上、総合的に判定した。

II 質の向上度

1. 質の向上度

〔判定〕 高い質を維持している

〔判断理由〕

分析項目Ⅰ「教育活動の状況」における、質の向上の状況は以下のとおりである。

- 産学官民連携型農学生命科学研究インキュベータ機構（アグリコクーン）では、平成 24 年度から農環境の放射線教育のために「農における放射線影響フォーラムグループ」を立ち上げ、現地調査、附属施設の活用、サンプルの測定等、実習・体験・演習に主軸を置いたプログラムを実施している。また、平成 25 年度には附属牧場で行われる牧場実習と、福島県伊達市小国地区で行われる森林実習をカリキュラム化しているほか、平成 24 年度には福島県飯舘村において、平成 27 年度にはスウェーデンにおいてワークショップを実施している。
- アグリバイオインフォマティクス教育研究プログラムでは、バイオインフォマティクスの基礎、方法論、先端トピックス等の 15 科目の講義を実施している。また、目的に応じて科目を選択し受講することが可能となっており、実践的な技術を身に付けるため、基礎と方法論の科目はすべて実習と一体化した講義を実施している。
- 環境調和農学特別プログラムを平成 27 年度から設けており、環境や生態系への影響についてディベートを通じて学ぶ演習の履修を必須としている。
- 国際農業開発学コースは平成 22 年度に学生の受入を開始しており、平成 26 年度までに 40 名を超える学生を受け入れている。

分析項目Ⅱ「教育成果の状況」における、質の向上の状況は以下のとおりである。

- 平成 22 年度から平成 26 年度の標準修業年限内の修了率は、修士課程は平均 85.4%、獣医学博士課程を除く博士後期課程は平均 59.8%、獣医学博士課程は平均 74.6%となっている。
- 平成 22 年度から平成 26 年度の学生の受賞・表彰は、平均 40 件程度となっている。また、平成 22 年度から平成 27 年度の日本学術振興会特別研究員の採択状況は、博士課程在籍者数の 10%程度となっている。

これらに加え、第 1 期中期目標期間の現況分析における教育水準の結果も勘案し、総合的に判定した。

2. 注目すべき質の向上

- 産学官民連携型農学生命科学研究インキュベータ機構（アグリコクーン）では、平成 24 年度から農環境の放射線教育のために「農における放射線影響フォーラムグループ」を立ち上げ、現地調査、附属施設の活用、サンプルの測定等、実習・体験・演習に主軸を置いたプログラムを実施している。また、平成 25 年度には附属牧場で行われる牧場実習と、福島県伊達市小国地区で行われる森林実習をカリキュラム化しているほか、平成 24 年度には福島県飯舘村において、平成 27 年度にはスウェーデンにおいてワークショップを実施している。
- 農学生命科学が関与する分野において先端情報利用科学の教育研究を充実させるため、アグリバイオインフォマティクス教育研究プログラムを設けており、バイオインフォマティクスの基礎、方法論、先端トピックス等の 15 科目の講義を実施している。また、目的に応じて科目を選択し受講することが可能となっており、実践的な技術を身に付けるため、基礎と方法論の科目はすべて実習と一体化した講義を実施している。

